

本来「THT」は、トレジャーハントツーリングのこと。今回の Ver.2・6 では、“THT26”の“T”と、“ハンドレッド・バイ・ハンドレッド”の“H”と、“シンキングMTB”の“T”で、「THT」としている。

これは自転車ソフト三原色の「ポタリング」「ファストラン」「マウンテンバイク」に通じる。

『Ver.2・6』以前と将来…！

『Ver.1 中級者への提案』（1993年～2003年）

“とれとれバイク”も“ブルベ”も日本では馴染みの薄い“ツーリングコンペティション”という、実は上級者向け（苦笑）。

『Ver.2 サイクリング未満の提案』（2005年～2012年）

その精神を活かしたポタリングバージョンが“THT26”ですが、逆にサイクリングでは無いと酷評される（涙）。

『Ver.3 ユザワヤ方式の提案』（2016年以降）

当企画で自転車ソフト三原色の定期リリースを実現し、“春番でソフトも売ろう！”のイメージを醸成したい。

ユザワヤは、都内の手芸用品のチェーン店。あらゆる素材を揃え、それらを使った手芸教室を開き、さらに展示会も催すという、究極のマッチポンプ型マーケティングを展開。

何故『Ver.2・6』？

『Ver.2・6 普通の道を普通に走る』（2013年～2015年／延長アリ）

“とれとれバイク”も“ブルベ”も“THT26”も、ソロで楽しめば、全く問題が無い。しかしグループだと集団暴走行為！？

つまり『Ver.2・6』は、自転車ソフトの標準化と機会均等を考えるアイドリング期間。

現状分析と活動指針の方向性

自主企画の「とれとれバイク」「ブルベ」「自転車さんぽ」、さらにメーカーや行政のイベント運営で、関連団体や警察と情報交換し、また、建設コンサルタンツや環境団体との交流もあって様々な角度から自転車走行環境を検証している。そして震災を挟んで、日本の自転車事情のコアな部分に同席する機会を得て、“日本の道”や“楽しむ環境”は、自転車にとって未だ不連続だと再認識した。

そのひとつに自転車の日常利用とスポーツ利用の二面性がある。その隔たりを「自転車さんぽ境界線」で埋めたい。年齢性別車種不問で楽しむ、主催者の大小や目的を選ばない「THT26**自転車さんぽ」は、日本のどこの街でも実施可能なように、普通の道を普通に走るための工夫が施されており、その可能性を秘めている。そして、その新たなキーワードを共有するための自転車版賢人会議「山の辺の道サミット」も提案したい。

インフラ整備の必要無い自転車ソフトの重要性を訴えるには「山の辺の道サミット」だけでは不十分なため、地味ソフト「THT26」の欠点を補う「4タイムズ提案」や、47都道府県に100km推奨コースを設定する「ハンドレッド・バイ・ハンドレッド」や、山道をMTBで走る法的根拠を考える「シンキングMTB」などの、自転車ソフト三原色の実証実験を多くの関係者に見える形で継続したい。

その見える形での提案として、複数媒体とのタイアップページや、旅行カウンターにも置く自転車旅冊子の配布を考えており、そのページタイトル「B×C(バイシクル・バイシクロ)」は、“自転車遊び内は十人百色”や“自転車多様性”という意味。そして『Ver.2・6』は、全国のサイクルショップで「春番でソフトも売ろう！」の確立が前提の『Ver.3』へ向けてのアイドリング期間であり、自転車旅の商品化に向けた課題を探る。

P9の【補足】もご覧ください。

